

PC-29

潰瘍性大腸炎における白血球除去療法
(LCAP) の有用性について

(内科学四講座)

○杉浦弘和, 片上利生, 金田繁樹, 宮岡正明,
森安史典
(腎臓内科)
中尾俊之

【目的】潰瘍性大腸炎(UC)は、血中に存在する蛋白分解酵素や活性酸素を放出する顆粒球と単球、またキラー活性を持つ細胞障害性Tリンパ球を含めた細胞性免疫により局所の炎症や組織障害が継続すると推測されている。さらに活性化した白血球は種々の局所障害を起こす細胞性免疫の発現を継続させると考えられている。今回我々は、無作為であるがUC患者の末梢血中より顆粒球や単球、リンパ球を含めた免疫担当細胞である白血球を血中より体外に除去し、局所炎症の鎮静化をはかる目的で白血球除去フィルターを利用した白血球除去(LCAP)療法を若干経験したので報告する。

【対象】治療前に患者の理解と同意を得た7名の左側大腸炎型または全大腸炎型で、中等症以上のUC患者を対象とした。男女比は3:4で、慢性持続型4例・初回発作型2例・再燃緩解型1例であった。

【方法】LCAPは大腿静脈より脱血した全血を血液ポンプを使用し直接体外循環用のIBD94フィルターを通して白血球を除去し、肘静脈より返血する血液灌流法で行った。治療法は集中治療として1週間に1度の割合で連続5週間行い、以後は症状にあわせて間隔を調節した。

【結果】慢性持続型の3例は効果なく外科手術となった、同病型の残り1症例は症状不変のため外来観察となった。その他の3例はいずれも有効で緩解に至った。

【考察】今回の検討では、LCAPは初回発作型や再燃緩解型で効果をもとめており、UC治療の一選択肢として考慮してもよい方法と思われた。

PC-30

細径気管支鏡による閉塞性
肺疾患診断の有用性

(内科学第一)

○峯村和成, 石塚史郎, 吉田 強, 宮本大介,
田胡秀和, 長手 聰, 富田章夫, 庫川恵理,
國澤 晃, 春日郁馬, 内海健太, 大屋敷一馬
(WHO 研究協力センター)
田中 満

【目的】外径2.2 mmの細径気管支鏡(BF-2.2T)を用いて閉塞性肺疾患患者の末梢気道を観察し、同症における機能と形態との関連性を比較するとともに、閉塞性肺疾患における内視鏡的診断の有用性を検討した。

【対象】非喫煙健常者10例を対照に、健常喫煙者15例、慢性安定期の小葉中心性肺気腫(CLE)患者20例とびまん性汎細気管支炎(DPB)患者10例を対象とした。

【方法】同意のもと従来の気管支ファイバースコープにて中枢気道を観察後、同生検鉗子孔よりBF-2.2Tを挿入し、可能な限り末梢枝を観察した。直視下にて各例平均3枝を観察し、分岐次数の同定と内視鏡所見との疾患別比較検討を行なった。

【結果】第10-13次分岐まで正常な気管支粘膜が連続していた非喫煙者に対し、喫煙者の70-80%の末梢枝に発赤、浮腫、多量の分泌物貯溜の所見を認めた。特徴的な末梢気道所見として、CLEでは72.7% (66枝中48枝)に顆粒状ないしは肉柱様気管支変形を、DPBでは51.6% (31枝中16枝)に中枢性の拡張と末梢での盲端状の閉塞を認めた。

【考察】CLEやDPBで認められた特異的な所見は末梢気道における炎症性の変化と思われ、かかる変化が閉塞性障害に関与しており、閉塞性肺疾患における細径気管支鏡の有用性を示唆するものと思われた。